

カキでのチャノキイロアザミウマに対する7月追加散布の有効性

～発生ピーク予測を利用した効果的な防除方法～

チャノキイロアザミウマはチャやブドウ栽培などで問題となる害虫ですが、近年、県内カキ産地でも被害が多くなっているため、発生ピーク予測に基づいた効果的な防除方法を検討しました。7月の発生ピーク予測日に合わせた防除を慣行散布に追加することにより、被害をさらに抑えられることが確認されました。

1. 背景と目的

奈良県内のカキ産地では‘刀根早生’や‘平核無’などの渋柿が生産されています。近年、県北部地域のカキ産地を中心にチャノキイロアザミウマの被害が増加傾向にあり、効果的な防除方法が求められています。

従来の慣行散布では、7月の発生ピークに合わせた防除ができておらず、被害増加の一因と考えられています。そこで、発生状況を予測できるシステムを活用し、発生ピーク予測日に基づく7月の薬剤散布の有効性を検証しました。

2. 研究成果の概要

試験は、2021年にカキ‘刀根早生’を用いて行いました。試験区は、産地で利用されている防除暦に基づく慣行散布区、JPP - NET（一般社団法人日本植物防疫協会、要有料ユーザー登録）で提供されているチャノキイロアザミウマの発生予測システムにより得られる7月の発生ピーク予測日の数日前に散布を行う7月追加散布区（表）および無散布区を設け、被害果率を比較しました。

表 発生ピーク予測日と薬剤散布日

発生ピーク予測日	7月追加散布区	慣行散布区
	-	4月15日
	5月11日	5月11日
5月21日	6月1日	6月1日
6月19日	6月18日	6月18日
7月12日	7月10日	-
8月1日	7月29日	-
8月22日	-	8月5日

※発生予測システムでは五條アメダスデータ（2021年）を使用

※-は散布なし

※太字は発生ピーク予測日に基づく散布

収穫期における被害果率は、無散布区で75.3%と多くの果実が被害を受けましたが、慣行散布区で11.8%と低くなり、7月追加散布区では4.0%とさらに低くなりました（図）。特に、7月追加散布区では、7月の発生ピーク時の被害が抑えられており、効果的な防除につながることが確認されました。

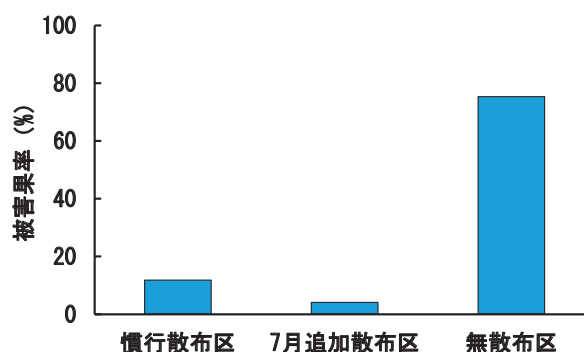


図 収穫期のチャノキイロアザミウマによる被害果率

3. 実用化に向けた対応

カキのチャノキイロアザミウマに対し、7月の発生ピーク予測に合わせた薬剤散布をすることにより、被害を低減できることが明らかとなりました。現在、県内のカキ産地に対し、県より発生ピーク予測日の情報が提供されており、それに合わせた薬剤散布が広まりつつあります。しかし、本試験結果からも依然として一定の被害は確認されることから、より効果的な防除につながるよう散布する薬剤、タイミングの検討をすすめたいと考えています。

（果樹・薬草研究センター 小島 英）